

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリヤはか
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりにし、いのちをた賜
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。
 爾 歸

【 グリゴリイ・パラマのトロパリ 第8調 】

せいきょうのとしび、きょうかいかため
 正 教 燈 教 會 保 固

およびきょうし、しゅうしらのかざり、しんがく
 及 教 師 修 士 等 飾 神 學

しのうちのかたれぬぐんし、きせきしやグリ
 師 中 勝 軍 士 奇 跡 者
 ゴリイ、テッサロニカのほまれ、おんちょうの でん
 ギ、テッサロニカ 譽 恩 寵 傳
 どうしよ、われらのたましいのすくわれんこ
 道 師 我 等 靈 救
 とをつねにいのりたまえ。
 常 祈 給

【 グリゴリイ・パラマのコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 しいんげんしゃグリゴリイよ、われらなんぢえいちの
 神 言 者 我 等 爾 睿 智
 せいにせられししんみょうなるきかんの、しいんがく
 聖 神 妙 機 關 神 學
 のこうめいなるラツパたるものをどうしんにかしよ
 光 明 角 者 同 心 歌 頌
 うしていのる、しいんぷよ、げんしのちえの
 祈 神 父 原 始 智 慧
 まえにたちえとして、われらのちえをか
 前 立 智 慧 我 等 智 慧 彼

れにむかわしめたまえ、われらがよばんた
向 給 我 等 呼 爲
めなり、おんちやうの でんどうしよ、よろ
恩 寵 傳 導 師 慶
こ べ。

【 大齋第二主日のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
今 何 時 世 世
いまきんぎやうのときはあらわれたあり、
今 勤 行 時 顯
しんばんはもんのかたわらにあり、ゆえにたち
審 判 門 側 故 起
てもものいみし、しょうかんのなみだときょうじゅつと
齋 傷 感 涙 矜 恤
をささげてよおばん、われらはうみの
捧 呼 我 等 海
まさごよりおおくつみをおこなえり、
砂 多 罪 行
もとむ、ばんゆうのぞうせいしゅよ、ゆるし
求 萬 有 造 成 主 赦

た ま え 、 わ れ ら が ふ き ゆ う の え い か ん を う け ん
給 我 等 不 朽 榮 冠 受

た め な り 。
爲

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行ふ者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き 毅、 せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 及び 成聖者の第1調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我等 保 我等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 んに 至
 たらん。

誦經) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我等 保 我等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 んに 至
 たらん。

誦經) 我が口は睿智を出し、我が心の思は智識を出さん、



【 アポストロス 使徒經 304 端 エウレイ書1章10節~2章3節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ} エウレイ人に^{しょ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き 聽くべし、

誦經) ^{しゅ なんぢはじ} 主よ、爾 ^{ち もとづ} 初めに地を ^{てん なんぢ て わぎ} 基 けたり、天も 爾 が ^{これら ほろ} 手の造工なり。此等は ^{しか なんぢ} 亡びん、然れども 爾
^{なが そん} は ^{これら みな} 永く存す、此等は ^{ごと ふる} 皆 衣 の ^{なんぢいふく} 如く古び、爾 ^{ごと これ} 衣服の如く之を ^ま 捲き、此等は ^{これら かわ} 易らん、然
^{なんぢ かわ} れども 爾 は ^{なんぢ とし おわ} 易らず、爾 の ^{かみ いづれ てんし むか} 年は終らざらんと。神は ^{かつ い} 何 の ^い 天使に對いて曾て云いしか、
^{なんぢわ みぎ} 爾 ^ざ 我が ^{わ なんぢ} 右に坐して、我が 爾 の ^{てき なんぢ} 敵を 爾 の ^{あし だい} 足の ^な 凳と爲すに ^{いた} 迄れと。彼等は ^{かれら} 皆 ^{みな} 奉事する ^{しん} 神、
^{つかわ} 遣 ^{すくい} されて、救 ^つ を ^{もの} 嗣がんとする者の ^{ため} 爲に ^{えきじ} 役事する者に ^{もの} 非ずや。是の ^{あら} 故に我等 ^こ 聞きし ^{ゆえ} 所 ^{われら} を ^き 聞
^{もつとも} 尤 ^{つつし} 慎 ^{おそ} むべし、^{あるい} 恐らくは ^{はな} 或 ^お は ^{けだし} 離れ ^{てん} 落ちん。蓋 ^{しら} 若し ^よ 天使等に ^つ 藉りて ^{ことば} 告げられし ^{かた} 言 ^は は ^堅 堅
^た く ^{およそ} 立ちて、凡 ^{いはい} の ^{ふじゅん} 違背と ^{こうせい} 不 順 とは ^{むくい} 公 正 の ^う 報 ^{われら} を ^{ごと} 受けしならば、我等 ^{すくい} 此くの如き ^{かえり} 救 ^を を ^願 願
^い む ^い ずして、如何 ^の ぞ ^が 追 ^え るるを得ん。斯 ^こ れ ^{はじめ} 始 ^{しゅ} 主 ^よ に ^{つた} 困りて ^{かれ} 傳 ^き えられ、彼 ^{もの} より ^よ 聞きし ^{われ} 者に ^に 困りて我
^ら 等 ^{うち} の ^{かた} 中 ^た に ^か 堅 ^{かみ} く ^よ 立 ^{その} てられ、神 ^{むね} に ^{したが} 縁 ^{きゅう} りて、其 ^{きゅう} 旨 ^{ちよう} に ^き 循 ^{せき} いて、休 ^{しゅ} 徴 ^{じゅ} 、奇 ^い 蹟 ^の 、種 ^{およ} 種 ^{およ} の ^{およ} 異 ^{およ} 能 ^{およ} 、及
^{せい} び ^{しん} 聖 ^{ぶん} 神 ^よ の ^{もつ} 分 ^{しょう} 予 ^{しょう} を ^{しょう} 以 ^{しょう} て ^{しょう} 證 ^{しょう} せられたり。

(比較用 口語訳) 「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変わるが、あなたは、いつも変わることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」とも言われている。神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたしの右に座していなさい」と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いつそう強

く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。というのは、御使たちをとおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしかせ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。

【 アポストロス 使徒經 318 端 エウレイ書 13 章 17 節～21 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{じん たつ} パヴェルが ^{しよ よみ} エウレイ 人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{およそ} 凡の ^{しさいちやう} 司祭長は ^{ささげもの} 禮物と ^{まつり} 祭祀とを ^{けん} 獻ずるが ^{ため} 爲に ^た 立てらる、^{ゆえ} 故に ^{かれ} 彼も ^{またけん} 亦獻ず

^{もの} べき物なかるべからざりき。^{かれも} 彼若し ^{ち あ} 地に在りしならば、^{しさい} 司祭と ^な 爲らざりしならん、^{けだしここ} 蓋此には

^{りつぽう} 律法に ^{したが} 循いて ^{ささげもの} 禮物を ^{けん} 獻ずる ^{しさいら} 司祭等、^{てんじやう} 天上の ^{もの} 者の ^{かたち} 形と ^{かげ} 影とに ^{ほうじ} 奉事する ^{もの} 者あり、モ

^{そのまく} イセイに其 ^{つく} 幕を造らんとせし ^{とき} 時に、^つ 告げられしが ^{ごと} 如し、^{いわ} 曰く、^{つつし} 慎みて ^{やま} 山に ^{おい} 於て ^{なんぢ} 爾を ^{しめ} 示

^{のり} されし ^{したが} 式に ^{いつさい} 遵いて、^{つく} 一切を造れと。^{しか} 然れども ^{かれ} 彼が ^{いまさら} 今更に ^{まさ} 優れる ^{ほうじ} 奉事を得たるは、^え 更に ^{さら} 更に

^よ 善き ^{きやく} 許約に ^{もとづ} 基ける ^{さら} 更に ^{やく} 善き ^{ちゆうほしや} 約の中 ^な 保者と ^{かな} 爲りしに稱う。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかつたであろう。彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。ところがキリストは、はるかかすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。

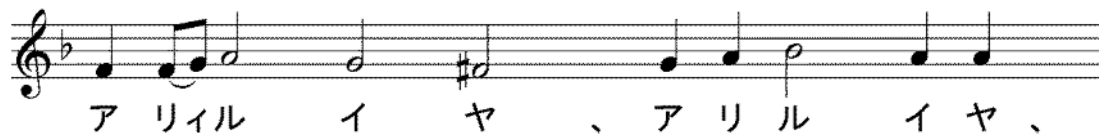
【 アリルイヤ 主日第6調 及び 成聖者の第2調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾に ^{へいあん} 平安、

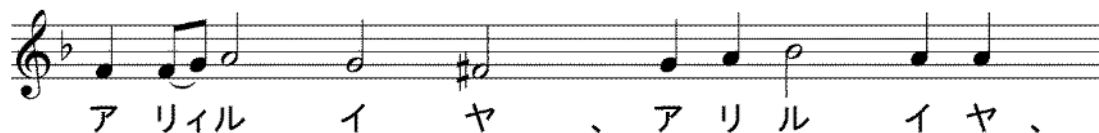
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

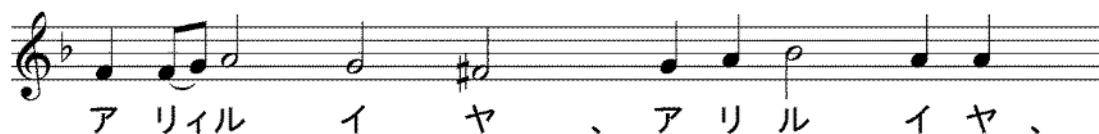
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ おおい した おもの ぜんのおしや かげ した やす} 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



誦經) ^{ぎじん くち えいち い そのした ぎ かた} 義人の口は睿智を言い、其舌は義を語る、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゆさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

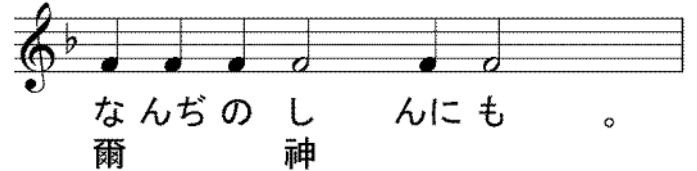
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

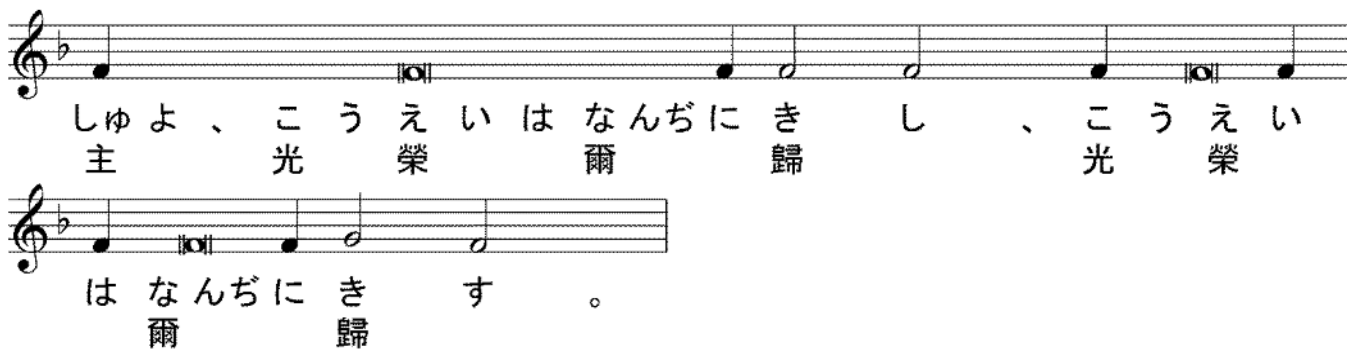
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書7端 2章1~12節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイスカペルナウムに入れり、彼が家に在ること聞えれば、

ただち おおひとあつまもんかたわらみいところいたかれこれおしえの
直に多くの人集りて、門の傍にも身を容る處なきに至れり、彼は之に教を宣

べたり。癱瘋の者を攜えて、彼に來れるあり、四人之を昇けり、人の衆きに因りて、

かれちかえそのあところやねひらこれあなちゅうぶうものふとこ
彼に近づくを得ずして、其在る處の屋蓋を啓き、之に穴して、癱瘋の者の臥したる牀

をつおろかれらしんみちゅうぶうものいこなんぢつみなんぢゆる
を縋り下せり。イイス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂う、子よ、爾の罪は爾に赦さ

る。此に或學士等の坐せるあり、心の中に議して曰く、斯の人何ぞ斯く褻瀆を言う、獨

かみほかたれつみゆるえそのしんもつただちかれらかおのれうち
神より外に、誰か罪を赦すを得ん。イイス其神を以て、直に彼等が斯く己の表に

ぎしかれらいなんぢらなんこころうちかぎちゅうぶうものなんぢ
議するを知りて、彼等に謂えり、爾等何ぞ心の中に斯く議する、癱瘋の者に、爾の

つみゆるいあるいおなんぢとことゆいいつれやすしかなんぢ
罪赦さると言い、或は起きて、爾の牀を取りて行けと言うは、孰か易き。然れども爾

らひとこちあつみゆるけんしためちゅうぶうものむかいわ
等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(癱瘋の者に向いて曰く、)

なんぢいおなんぢとことなんぢいえゆかれただちおとことしゅう
爾に謂う、起きて、爾の牀を取りて、爾の家に往け。彼直に起き、牀を取りて、衆

まえおいしゅうおどろかみさんえいわれらいまかつかごとみ
の前に於て出でたり、衆駭きて、神を讚榮し、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざ

りきと云うを致せり。

(比較用 口語訳) イエスがまたカペナウムにお帰りになったとき、家におられるといううわさが立ったので、多くの人々が集まってきて、もはや戸口のあたりまでも、すきまが無いほどになった。そして、イエスは御言を彼らに語っておられた。すると、人々がひとりの中風の者を四人の人に運ばせて、イエスのところに連れてきた。ところが、群衆のために近寄ることができないので、イエスのおられるあたりの屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、あなたの罪はゆるされた」と言われた。ところが、そこに幾人かの律法学者がすわっていて、心の中で論じた、「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神をけがすことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか」。イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて、「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか。中風の者に、あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きよ、床を取りあげて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と彼らに言い、中風の者にむかって、「あなたに命じる。起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、すぐに床を取りあげて、みんなの前を出て行ったので、一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 イオアン福音書36端 10章9～16節 】

司祭^{しゅ}は彼^{かれ}に來れる^{きた}イウデヤ人^{じん}に謂^いえり、我^{われ}は門^{もん}なり、我^{われ}に由^よりて入^いる者^{もの}は救^{すくい}を得^え、且^{かつ}入^いり且^{かつ}出^いでて、草場^{くさば}を得^えん。盜^{ぬすびと}の來^{きた}るは、唯^{ただ}盜^{ぬす}み、殺^{ころ}し、滅^{ほろぼ}さん爲^{ため}のみ。我^{われ}の來^{きた}りしは、其^{その}生命^{いのち}を有^{たも}ち、且^{かつ}豐^{ゆたか}に之^{これ}を有^{たも}たん爲^{ため}なり。我^{われ}は善^よき牧^{ぼくしや}者^者なり、善^よき牧^{ぼくしや}者^者は己^{おのれ}の生命^{いのち}を羊^{ひつじ}の爲^{ため}に捐^すつ。牧^{ぼくしや}者^者ならざる傭^{やといびと}者^者、羊^{ひつじ}の己^{おのれ}に屬^{ぞく}せざる者^{もの}は、狼^{おおかみ}の來^{きた}るを見て、羊^みを棄^{ひつじ}て逃^すぐ、狼^{おおかみ}は羊^{ひつじ}を奪^{うば}い、又^{また}之^{これ}を散^{ちら}す。傭^{やといびと}者^者は逃^すぐ、其^{その}傭^{やといびと}者^者たるを以^{もつ}てなり、羊^{ひつじ}を顧^{かえり}みず。我^{われ}は善^よき牧^{ぼくしや}者^者にして、我^{われ}に屬^{ぞく}する者^{もの}を識^しり、我^{われ}に屬^{ぞく}する者^{もの}も亦^{また}我^{われ}を識^しる。父^{ちち}の我^{われ}を識^しるが如^{ごと}く、我^{われ}も亦^{また}父^{ちち}を識^しる、且^{かつ}我^{われ}が生命^{いのち}を羊^{ひつじ}の爲^{ため}に捐^すつ。我^{われ}に又^{また}他^たの羊^{ひつじ}、此^この牢^{おり}に屬^{ぞく}せざる者^{もの}あり、我^{われ}は彼^{かれら}等^らをも引^ひくべし、彼^{かれら}等^らは我^{われ}が聲^{こえ}を聽^きかん、而^して一^{ひとつ}の群^{むれ}一^{ひとつ}の牧^{ぼくしや}者^者と爲^ならん。

(比較用 口語訳) わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたし

がきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている。それはちょうど、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。そして、わたしは羊のために命を捨てるのである。わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ へ